

天文博士安倍晴明は見た！

～藤原氏繁栄の陰役者？

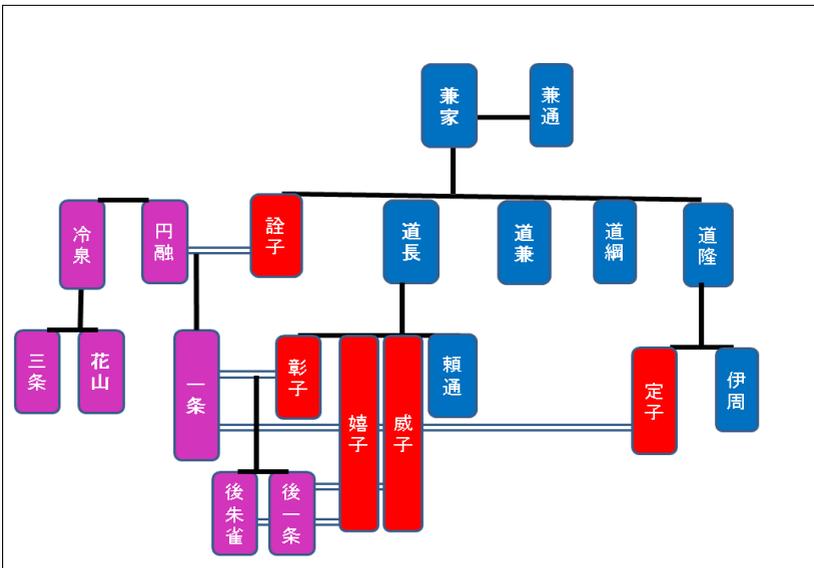
安倍晴明（921－1005）といえば古典『今昔物語』から現代の『陰陽師』によって妖術師のようなイメージが定着していますが、実は千年前の京の都で活躍した天文学者です。彼の役職「天文博士」とは星のことをよく知っている先生という呼び名ではなく、れっきとした太政官の官職名で、彼は中級国家公務員なのです。紫式部や清少納言たちと同時代ですから御所のどこかで出会うこともあったでしょう。彼の前半生はなぞに包まれていて、ようやく40歳で「天文得業生」としてデビューします。これは優秀な天文生に与えられる称号です。52歳で天文博士となつてからは多忙な業務をこなしていたようです。彼の本来の役目は天文現象を克明に記録し、日月食・彗星・流星など変わったことがあれば直ちに内裏へ奏上することです。「天変」に敏感な朝廷にとって重要な仕事でした。陰陽寮の天文分野では十数名のメンバーで観測当番をこなしていたそうですから、それだけでも相当大変だったでしょう。さらに主な仕事は各種公式行事への参加、天皇・皇族・貴族のための占いや祈祷・・・などなどがあります。当時としては非常に長命で、晩年は藤原道長（966－1027）の信任が厚く、80歳で従四位下、82歳で大膳太夫・左京権太夫に任じられています。道長自筆の日記である『御堂関白記』（国宝）には、長保六年二月十九日（1004年3月12日）に道長が84歳の晴明を伴って新しく作る法華三昧堂の土地探しに宇治木幡に行ったこと、その日は「癸酉の日曜」と記されています。『御堂関白記』は陰陽師の作った具注暦に道長が書き込んだもので、そこには干支・二十四節気・吉凶の占いはもちろん、日月火水木金土までが書いてあります。この日の干支と曜日は、実際に計算して確認されました。曜日が輸入されたのは決して明治になってからではなく、9世紀初に空海（774～835）が唐から持ち帰ったもので、藤原時代には密教行事だけでなく広く貴族間に使われていたようです。早春の日曜日に宇治に出かけた帰りには、どこかで梅花見物でも楽しんだのではないのでしょうか？



彼は 84 歳の没年まで諸行事を行うなど現役として活動しています。あの世から「頑張れ中高年！」と叱咤激励されそうですね。

花山帝退位の天変

彼の天文博士在任中に起こった天変の中で、日付が確定しており最も有名なのが寛和二年六月二十二日(986年7月31日)の花山帝退位事件です。ころは平安中期、戦乱もなく死刑も行われず一見平和な時代でした。橘氏・伴氏・菅原氏・紀氏・源氏(皇族)など有力な他氏を排撃し朝廷の高位高官を独占した藤原氏は陰謀による仲間同士の骨肉の争いをうち広げていきます。そして「乱にも変にも」よらず摂関政治を確立していった総仕上げの事件がこれなのです。これを企画・総指揮する右大臣藤原兼家(929~990)



は、娘詮子が円融天皇との間に生んだ懐仁(やすひと)親王を帝位に就けるため、花山天皇(968~1008:在位984~986)を退位させようと企みます。彼には道隆、道綱、道兼、道長という息子がいますが、ここで暗躍するのは三男道兼です。帝はまだ19歳、とても退位する歳ではありませんが、寵愛し



ていた女御をなくし失意の底にあったのに乗じて、道兼は帝と一緒に出家しましょうと誘います。夜半、帝を御所から連れ出し、土御門大路を東行する途中、安倍晴明宅の前を通り、東山の花山寺（元慶寺：山科区北花山河原町）に着きます。ところが、いざ髪を剃る直前になって両親と最後の別れをするからといって寺を抜け出しそのまま帰ってきませんでした。すでに頭を丸めてしまった花山法皇、その時になってやっとだまされたことに気づいたけれど、もはや遅し。翌朝 7 歳の懐仁親王は即位して一条天皇となり、兼家は念願の外祖父となり、摂政に就任します。この事件は権力が兼家の子孫のみに属する契機となったので、彼の陰謀クーデターといわれますが、むしろ一滴の血も流さずに象徴天皇制を確立したと評価されてもいいのではないのでしょうか。兼家の没後、道隆さらに道兼が継ぎますが、2 人とも短期間で病没、特に道兼はわずか 11 日の在任でした。そしてやがて世は道長の時代に移っていきます。ちなみに兼家の 4 人の息子のうち道綱だけは摂政・関白になれず右大将とまりの人生を送りますが、彼の母は兼家の妻の中で最も有名で、『蜻蛉日記』を著わしたり、また百人一首にも激情的な歌を残しています。一条天皇の皇后である定子（道隆の娘）には清少納言が、中宮である彰子（道長の娘）には紫式部が仕えていました。さらに和泉式部、伊勢大輔などを加え、あまたの才女たちが活躍した時代です。華やかな王朝文化が栄える前夜には上記のような凄惨な事件があり、それには晴明も関与していたようなのです。

帝おりさせたまふと
見ゆる天変ありつるが、
すでになりにけりと見
ゆるかな・・・。

左の文章は『大鏡』の中の有名な件で、高校の古文の教科書にも載っていますからほとんどの人は眼にしたでしょう。当日の深夜、花山天皇が御所から花山寺に行く途中、晴明の家の前を通った時に晴明は「帝の退位を示すような天変があったが、事は既に終わってしまったようだ。」と叫んだと記されています。帝の退位を示す天変とは、一体何だったのでしょ？

この天変について斎藤国治氏は木星がてんびん座 α 星 (2.75 等星) へ犯を起こしたことだと述べています[2][3]。犯とは天体同士の異常接近ですが、食のように重なることではありません。実際に計算した結果、木星は 7 月末に、てんびん座

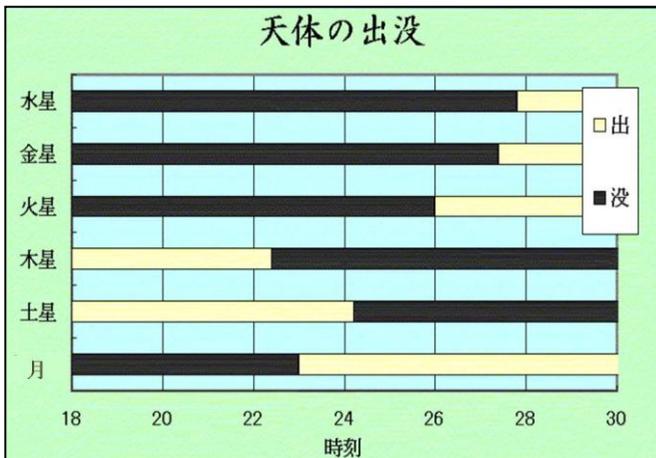
α 星の約 0.5° 北にあることがわかります。当日この 2 星は午後 10 時半ころ南西の空に沈むまではこの犯が見えたでしょう。晴明はこの天変を内裏へ急告しようとしたけど、すでに退位後のことで間に合わなかった...果たしてそうなのでしょうか？

大鏡の上記の文章のもう少し前を読んでみると、帝が御所を出ようとしたときには「有明の月のいみじう明りければ・・・月の顔にむら雲のかかりて」から出発したと書かれています。旧暦22日ですからほぼ下弦の月、月の出は真夜中の12時前、帝の夜行はその後しばらくして月に雲がかかったころですから、多分1時か2時ころです。木星はすでに沈んでしまった後、なぜ清明は3~4時間も経ってから奏上せねばと言ったのでしょうか？



木星は12年弱で天球上を一周するので、ほぼ黄道上にあるてんびん座 α 星とはこの周期で犯を起します。実際974年、962年、950年にも起こっています。清明はこの時すでに65歳で天文に熟知していたはず、12年前、24年前の犯について知らなかったとは考えにくい。いやこの度の犯も前もって知っていたかも知れません。古来、中国の天文学では白道に沿って二十八宿を定め、各宿で基準になる星を距星と呼びました。そのひとつ氏宿の距星がてんびん座 α 星で、天文官にとっては重要な星です。しかしこの犯はそれほど珍しい天象とは言えません

他に天変の可能性はないものか？深夜1時2時ころには木星・土星はすでに沈み、水星・金星・火星はまだ東の地平線下です。彼がこのとき見たものは惑星現象ではないようです。では月は？前述のようにこの日、月の出は12時前で翌朝までおうし座のすばる



のあたりに見られます。栗田和実氏は午後 11 時ころから翌日 1 時ころまで起った月のすばるの前面通過を指摘しています。これなら帝が御所を出て山科の花山寺に向かう途中、清明の家の前を通り過ぎたころに良く合います。すばるといえば枕草子の一節を思い出しますが、古代から親しまれてきたこの星々を半月が隠したのです。すばるの食は 2006 年から 2009 年にかけて何度か起こりましたが、実際にはすばるの星々に比べ月が明るすぎて見えにくいものです。

筆者は「木星のてんびん座 α 星への犯（前半夜の西空）」と「半月がすばるを隠す（後半夜の東空）」のどちらかを二者択一するのではなく、両方を合わせて独断的解釈を試みました。

ベテラン観測家の清明はすでに数日前から木星の犯が起ることもすばるの食が起ることも予知していた。彼はこの 2 つの天変がこの夜、起ることを帝に奏上すべきなのに、藤原兼家・道兼父子に密告した。彼らは大喜びで、帝に退位を強く勧めた。帝も星のお告げならやむなしとしぶしぶ出家を決意した。清明は予報が両方とも当たり、帝がすでに退位したのを確認してから役目上の義務として報告に行こうとした。

そうならば清明はこのクーデターの加担者ではないか・・・さて真相は？

この事件の後、清明は公私ともに仕事のオファーが増え、位階も昇進していきます。65 歳になってヒノキ舞台に立つきっかけがこの天変だったようです。事件の 2 年後、清明が花山帝退位事件に関与していたことを示唆するような天変があるのです。永延二年八月（988 年 9 月）、



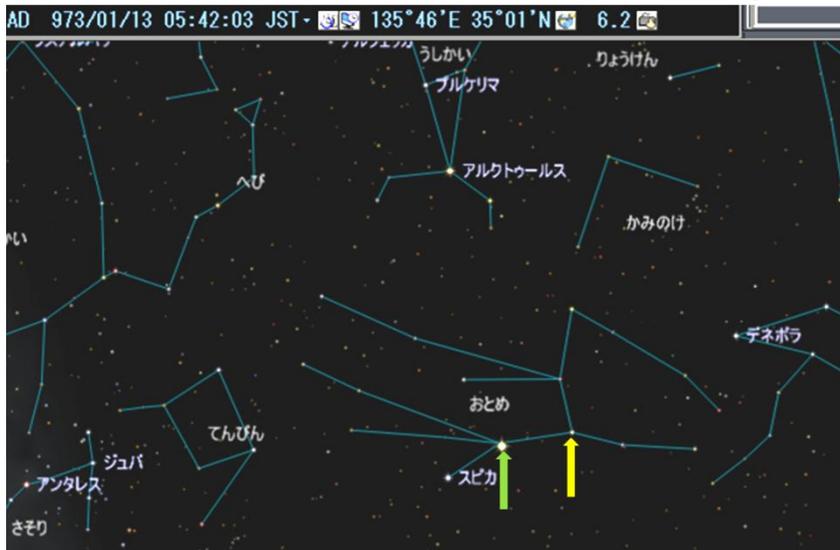
熒惑星(けいわくせい：火星)が軒轅女主(けんえんじょしゅ：しし座のレグルス)を犯す(接

近) ことがありました。帝(一条)は重い物忌みに入り、天台座主の尋禪が熾盛光(しじょうこう)法を、安倍清明が熒惑星祭を執り行うことになりました。しかし清明は決められた日に行わなかったために、怠状(始末書)を召されたという話が『小右記』(藤原實資著: 957~1046)に載っているそうです。これは清明の失敗談として語られています[7]。ところがレグルスはほぼ黄道上にあるので、惑星と接近することは決して珍しくないことです。火星とは2年余の周期で出会い、988年9月18日の前にも986年10月12日、984年11月21日・・・にも接近しています。清明はこれらのことを承知していて、熒惑星祭なんぞ要らないと思ったのではないのでしょうか?しかし幼帝とはいえ違勅に対して始末書だけとはずいぶん寛大な処置で、左遷降格されたようすもありません。実は摂政兼家は清明の理を認め、2年前の返礼として軽い処分ですませたというのは筆者の思いすごしでしょうか。

さまざまな犯

清明が天文博士に任じられた天禄三年十二月六日(=973年1月13日)とその翌年の天禄四年一月九日(=973年2月14日)、に天変による天文密奏が行われています。これは[5]に載っているだけで詳しいことはわかりませんが(密奏ですから)、それに見合う天変をパソコンで計算しながら探してみましよう。このころ日月食はありませんが、前年12月から3月にかけて、金星と火星が日没後の西天で離散集合していくようすが見られます。972年12月2日にやぎ座にて接近した後、みずがめ・うお・おひつじと移っていき、973年3月25日におひつじ座で再会します。その間の1月、2月には両星は離れていましたが、異様な動きが目をついたのかも知れません。それより高い可能性で考えられるのは木星(下図緑矢印)のおとめ座 θ 星(4等星)への犯すなわち異常接近です。972年12月に木星はおとめ座を東進(順行)中で θ 星に次第に近づいていきます。ところが翌年1月10日ころから2月初までこの星のすぐ西側でほとんど動かず停止しているように見えます。そしてその後は離れていく、すなわち西へ移動(逆行)するのです。逆行は5月中旬まで続きその時は γ 星(下図黄矢印)あたりに達します。その後はまた順行に転じますが、上記の天文密奏は時期的に木星の留(停止)に当たります。火星や木星の留は中国では紀元前から注目され記録されていた天文現象で、清明もきっと知っていたでしょう。現在私たちは「惑星は太陽に近いものほど速く公転する」ので、上記の事件は地球の公転が木星の公転運動を追い越していくために起こる現象であるということ

を知っていますが、それはこれより 600 年後 17 世紀初にケプラーによって発見された法則によるもので、当時には天変と思われていました。



973 年 1 月 13 日早朝の東天 左矢印はおとめ座 θ 星、右矢印は γ 星
ステラナビゲータ 8 (アストロアーツ) より作成

また天延二年十二月三日 (=975 年 1 月 17 日)にも天文密奏を行っていません。そのころの天変としては 1 月 15 日の日食と 30 日の月食がありますが、日本ではこの日食は日没後で、月食は月の出の前に起こるのでともに見られないはずで、一方、金星と木星が前年末から接近していて、1 月中旬には夜明け前に東南の空アンタレスの北に見られます。11 日には細い月も一緒に見えたはずで、彼はこの 4 天体の集合を天変としたのかもしれませんが・・・もっとも流星、彗星、新星の可能性もあります。

975 年 8 月 10 日のわが国最初の皆既日食の記録で、これについては p** で記載しました。

ハレー彗星

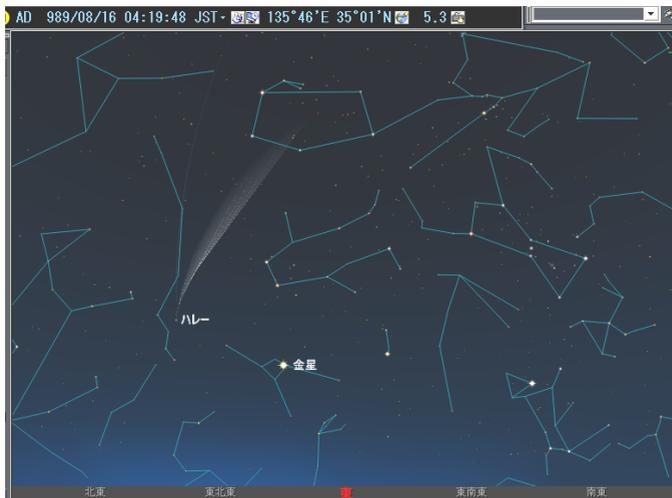
『日本紀略後編九』に「永祚元年六月一日庚戌、其日彗星見東西天。七月中旬、通夜彗星見東西天」という記載があります。989 年 7 月 6 日のことです。また『諸道勘文四十五』には「永延三年七月十三日彗星見東方、経数夜、長五尺許」と記され、これは同年 8 月 16 日のことです。実はこの年、永延三年は八月に永祚元年と改元されましたが、それは彗星の出現の

ためということが『扶桑略記』に記されています。彗星が現れるということはそれほどまでに大事件で、この年の後にも 1097 年（永長⇒承德）1106 年（長治⇒嘉承）1110 年（天仁⇒天永）1145 年（天養⇒久安）などがあります。ヨーロッパ人ほどではないとしても、やはり長い尾を天空に引く彗星は不吉な兆し・恐怖の的だったようです。清明が彗星を観測したと言う記録は残されていませんが、天文博士がこの天変に知らん顔とは到底考えられません。

この彗星は明らかにハレー彗星です。ハレー彗星の最古の確かな記録は中国の「史記・秦始皇本紀」にあり、始皇帝がまだ秦の青年王だった BC240 年のことです。わが国では『日本書紀』の天武十三年（684）の記録が初めてで、その次の 760 年を除いて毎回出現が記載されています。989 年の出現記録は宋、高麗および日本にあります。中世ヨーロッパには天文記録が少なく、1066 年以降の出現記録はありますが、この年の記録は見つかっていないようです。[1]

この年の夏の天象を再現してみると 7 月初旬に日の出前、東天のおうし座に現れ、次第に東北へ移っていき、下旬にはふたご座に移ります。8 月中旬より足を速め、下旬にはしし座とおおぐま座の間を通り抜け、9 月上旬おとめ座に達し、下旬にはてんびん座に達します。9 月 6 日に近日点通過のため太陽と同方向となり、見えない日が数日あったがその後、日没後の西の空で眺められたはずです。[6]

近日点通過の前から彗星は太陽と地球の間に入っていますから、彗星の長い尾は地球を包み込んでいます。実際に、地球がハレー彗星の尾の中に入るという事件は 1910 年 5 月 19 日に起こりました。20 世紀の世でも大騒動になったそうです。



989 年 8 月 16 日早朝の東天
ステラナビゲータ 8（アストロアーツ）より作成

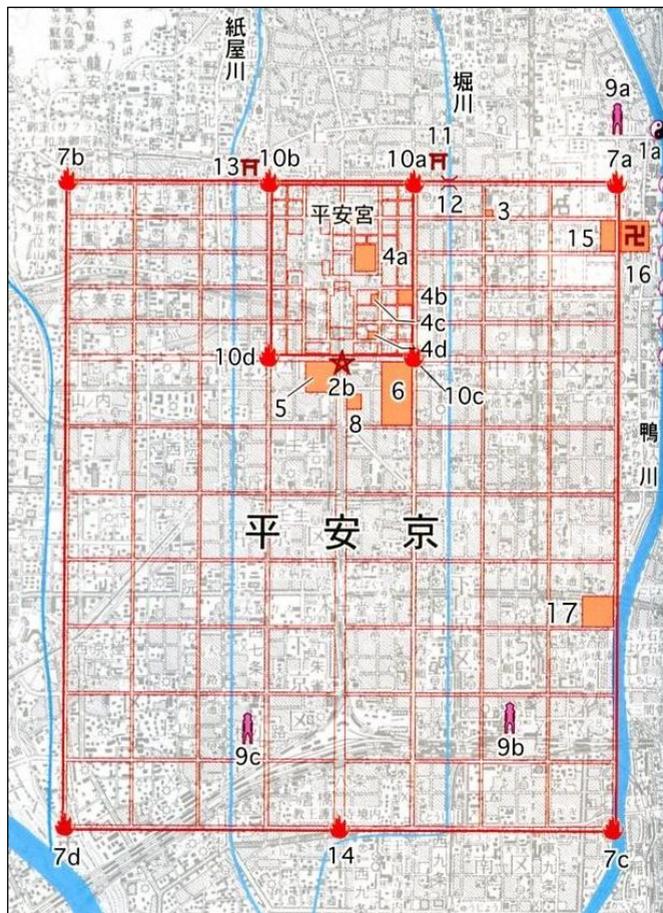
当時の平安京は 現在の京都市に比べずっと西寄りでした。東西の中央である朱雀大路は現在の千本通りで、内裏は一条二条大宮で囲まれた方形にありました。彼の勤務先である陰陽寮は現在の千本丸太町の東あたり(次ページ地図の 4c) でした。清明神社は社伝によると、清明の没後間もない 1007 年に創建されました。

この神社はなぜか東向きで(ほとんどの神社は南向きですが)境内いたるところに五芒星のマークが見られます。清明神社は、平安京の外で大内裏の北東角、いわゆる鬼門に位置しています。清明は没後も大内裏の鬼門を守っていると言えますね。境内には一条戻橋のミニチュアがあります。

この橋はあの世とこの世をつなぐ橋であり、橋の袂に(写真中央左あたり)にある像は、清明が魔術を行うときのアシスタントといわれる式神です。この地は清明の旧宅跡と言われていますが、実は彼の旧宅は、少なくとも花山帝退位の 986 年には、西洞院土御門通り東北角(地図の 3)、現在のブライトンホテル付近にあったようです。なおその通りを東進すると道長の旧邸土御門殿に至ります。では清明神社は彼の旧宅跡ではないのか?・・・晩年になって裕福になった清明はこの地に別邸を持ったのかもしれないね。



参考 臼井正 あすとろん No3 p25 2008



『安倍晴明と陰陽道展』（京都文化博物館・読売新聞社 2003）より

- 3 安倍晴明宅 東西は土御門通り 南北は西洞院通り
- 4a 内裏 4b 大膳職 4c 陰陽寮（晴明の勤務先） 4d 主計寮 5 穀倉院
- 6 神泉苑 7a-7d 京城四隅厄神祭推定地
- 10a-10d 宮城四隅厄神祭推定地 11 清明神社 12 一条戻橋
- 13 大将軍八神社 14 羅城門 15 藤原道長土御門殿 16 法成寺
- 17 河原院（伝芦屋道摩寓居跡）